A．授業研究

都築　亨　　酒井為久　　柳田嘉久　　冨田　昇　　北田明子
鈴木　孝　　宮田　学　　矢木　修　　飯島幸久　　伊藤悟由

〔I〕教育実習指導の効率化とシステム化

――プロジェクト二年次の実践報告――

宮　田　　学

1. プロジェクトのねらいと一年次の実践

文部省より「附属学校教育方法等改善経費」をいただいて、教育実習指導に関する3年計画のプロジェクトが昭和55年度にスタートした。前回、紀要第26集で紹介したように、本校における教育実習は、名古屋大学の学生の場合、〔表－1〕のような流れで進められてゆく。

〔表－1〕　教育実習の流れ

時期	内　容・期　間	指導者	場所
三年次※1	①教科教育法（前期・後期の通年：4単位）※2	大学教官および附属教諭	大学
四年次	②実習生に対する全学オリエンテーション（4月中旬「教育実習の手引」使用）	大学教官※3	大学
	③本校におけるオリエンテーション（1日）	附属教諭	附属
	④教育実習（2週間）	附属教諭	附属
	⑤反省会（実習期間の最終日）	附属教諭	附属

※1　理科教育法については、二年次で取得することもある。
※2　理科教育法の場合は、半期て4単位。
※3　昭和57年度より、附属教諭も加わるようになった。

本プロジェクトは、個々の指導過程を改善するとともに、その間の有機的なつながりを求めることによって、教師側のむだを省き、実習生が行う実習内容を充実させることをねらったものである。プロジェクト一年次の55年度は、教育実習の流れの②および③の改善に焦点を合わせて、

(1)　本校オリエンテーション用プログラムの編集計画の立案
(2)　「教育実習の手引」の改訂準備
(3)　中学校の授業の録画
(4)　視聴覚教室の整備
(5)　東京学芸大学教育工学センターおよび同附属小学校の視察

などを実施した。これらの実践の内容とそれに至るまでの経過報告については、上記の紀要第26集を参照していただきたい。

2. プロジェクト二年次の研究の概要

プロジェクト二年次にあたる56年度には、教育実習の流れの①、②、③の各過程の充実と、それらのつながりを求めて

(1)　オリエンテーション用プログラムの製作
(2)　「教育実習の手引」の改訂作業
(3)　高校の授業の録画
(4)　「教科教育法」におけるビデオの活用
(5)　全学オリエンテーションの改善

などに取り組んだ。以下にその内容を詳しく報告するが、この他に、本校視聴覚システムの整備や金沢大学教育学部教育工学センターおよび附属高校の視察を行った。これらについて述べておこう。

プロジェクト一年次の経費では、視聴覚教室にＶＴＲおよびこれと接続した親子テレビを設置した。二年次では、これをさらに発展充実させ、中学棟の各教室にテレビ一台を設置し、視聴覚教室のＶＴＲと有線で結んだ。このことにより、実習中には、各教科毎にビデオが利用できる他、ふだんの教育活動の中でも各教室で教科の学習や道徳などの時間にテレビ番組を見たり、学年単位または全学年でビデオによる集会を実施することなどが可能となった。

金沢大学の教育工学センターでは、主に「理科教育法」におけるビデオ装置の活用状況を見聞し、附属高校では、教育実習指導の現状や「手引書」の編集に関する話をうかがった。筆者が特に注目したのは、教育工学センターにおいて開発研究中のビデオプログラムであった。これは、モデルとなる授業をＶＴＲで収録しておき、このビデオを学生や現職教育の教師に見せ、授業の途中でビデオを止め、そのあと授業者はどうしたのかを予測させたり、自分だったらどうするかを考えさせるというものである。モデルとなる授業を数多く収録し、それに合ったプログラムを開発すれば、教育実習指導で行われているかなりの部分がカバーできそうに思われた。

3. オリエンテーション用プログラムの製作

本校で教育実習を行う実習生を対象にして行われるオリエンテーションは、毎年、次に示すような手順で進められてきた。

〔表－２〕 校内オリエンテーションの内容

指導の内容	指導者	形態
1. 実習に関する諸連絡	教務部長	全体
2. 学校長あいさつ	学校長	全体
3. 附属学校の運営および組織の説明	運営委員	全体
4. 各部の校務内容・現状の説明（指導部、学事部、図書部、生徒部、教務部）	各部長	全体
5. 実習教科の指導教官との連絡・打合わせ	指導教官	各科毎

このうち、３および４の講話の内容は毎回ほぼ同様なので、Ⅰ期（６月）実習生対象のオリエンテーション時（昭和56年５月25日実施）に、講話をＶＴＲで録画し、これを〔表－３〕のように、オリエンテーションプログラム第一部として編集した。

〔表－３〕オリエンテーションプログラム
第一部：附属学校における教育活動（約50分）

1. 附属学校の特色	（運営委員）
2. 図書館の運営と実態	（図書部長）
3. 指導部のあり方と生活指導	（指導部長）
4. 生徒会活動と自主性	（生徒部長）
5. 教師の仕事と校務分掌	（学事部長）

また、プロジェクト一年次に収録した中学校の授業についても、授業者が「ヤマ場」と考えるところを各教科10分間ほど抽出して、プログラムの第二部とした。この際には、授業全体の指導計画案または実施記録をプリントにして実習生に渡し、授業の全体像かつかめるように配慮した。

〔表－４〕オリエンテーションプログラム
第二部：各教科の授業風景（約50分）

1. 国語「ことばのきまり入門」	（中１）
2. 社会「鉄砲伝来」	（中１）
3. 数学「連立方程式の文章題」	（中２）
4. 理科「実験のまとめ」	（中２）
5. 英語「 call を用いた第五文型」	（中２）

このようにして出来あがったビデオ番組をⅡ期（９月）の実習生を対象としたオリエンテーションにおいて用いてみた（７月６日実施）。一年次のプロジェクト経費で視聴覚教室には、ＶＴＲ装置と親子テレビ（内子テレビ２台）が設置された。この設備を教育実習指導に活用した初めての試みとなったが、従来のオリエンテーションに比較して、中学の授業の様子を紹介することができた点で大いに評価できる。実習生たちの反応も概して好評で、実習最終日の反省会においてアンケート調査したところ、〔表－５〕に示すような結果が得られた。

4. 「教育実習の手引」の改訂作業

名古屋大学の学生を対象にして行われる教育実習事前指導（全学オリエンテーション）の際に、「教育実習の手引」と「教育実習記録」が渡され、実習に役立てられていることは、前回の報告で述べた通りである。この「手引」の中に、「学習指導案の立て方」というのがあり、国・社・数・理・英の各教科について、高校および中学校の単元計画案、学習指導案が掲載されている。この例として、社会科（高校・日本史）および国語科（中学）のものを前回の紀要第26集に示しておいた。従来のものは、この単元計画案・指導案だけを示すだけにとどまり、形式の見本として役立つものの、教科の授業過程や指導技術を具体的に学びとるようなものにはなっていなかった。これを反省して、今回の改訂作業では、実習生がその教科の授業を構想する際の役に立つように、ということを念頭に置いて、教科毎に様々な工夫をした。当然のことながら、従来の「手引」が49ページから成っていたのに対して、改訂された昭和57年度用の「手引」は77ページ（約1.6倍）

〔表－5〕オリエンテーションについてのアンケート　（昭和56年9月21日実施：回答者13名）

1. 従来は、先生方に直接話していただいていました。その場合と比較すると、ＶＴＲによる話は、

すっとよい	よい	同じ	悪い	ずっと悪い	（無答 1名）
	5名	4名	3名		

※それはなぜですか？
○両方が気楽な立場　○特に直接な話である必要はない　○先生方の手数が省ける
○先生による補足があればもっとよかった　○ＶＴＲだと先生方に質問できない

2. 新しく、授業をＶＴＲで見てもらいました。この授業のＶＴＲは、

(1)

とてもよかった	よかった	どちらでもない	よくなかった	まったくよくなかった
1名	10名	2名		

※それはなぜですか？
○授業のやりとりがわかった　○生徒の反応を直接みられない　○少々聞きとりにくかった
○生の声でないと印象が弱い　○いつもの授業らしくないと思った

(2)自分の教える教科以外の授業も見たわけですが、その点についてどう感じましたか。

とても役立った	役立った	どちらでもない	あまり役立たなかった	まったく役立たなかった
	11名	1名	1名	

※それはなぜですか？
○教科によって異る雰囲気を知ることができた　○実習前は関心が自分の教科だけに向いている
○板書の仕方、生徒への目の配り方など参考になった　○先生の個性があった

3. 全般的な感想・意見を自由に書いて下さい。
○指導案など見せてもらいよかった　○先生$\frac{1}{3}$、生徒$\frac{2}{3}$の比率でＶＴＲをとるとよい
○必ずしも全教科にわたらずともよい　○ＶＴＲ自体があまり好きでない

のものとなった。改訂の内容を教科毎に新旧対照表として一覧してみると〔表－6〕のようになる。※印は新しく加えられた項目、( )内は各項目毎のページ数、〔 〕内は教科全体の合計ページ数を示す。

今回の改訂は、各教科の教官グループ毎になされたために、教科による形式上・内容上のばらつきが見られる。これはやむをえないことではあるが、プロジェクト三年次では、他教科の内容から学べるものを取り入れ、不統一を解消する方向で改訂作業をさらに進める予定である。

今回の改訂の意図についてはすでに述べたが、国語科、社会科、数学科、英語科に見られるように、その教科の学習指導を考えるに際しての基本的な留意点や、教室での注意事項をまとめたことに最大の特色がある。また、数学科では、中・高の教材のつながりについての詳しい図表を載せているが、２週間という短い期間の中で指導する教材がその前後においてどのように扱われるのかを一覧できるので、実習生にとっては大いに役立つものと期待されている。さらに、教科書から該当時の教材を抜粋して学習指導案を内容的に補って、授業者の意図をより正確に理解させるようにしたり、英語科のように、授業者による自作プリントの一部を載せたりしたことなどにも、今回の改訂の精神が生かされていよう。なお、英語科の指導案のうち、中・高それぞれ１つの授業はＶＴＲで録画されている。これを、後述するように、「教科教育法」で活用した。

5. 高校の授業の録画

プロジェクト一年次では中学校における国・社・数・理・英５教科の授業風景を録画したが、二年次は高校における５教科の授業を録画することにした。これは、すでに述べたオリエンテーション時のプログラムとして編集することを意図したものであるが、同時に、「教科教育法」で活用されることも考えて行われた。

昭和56年11月から57年３月にかけて、次のように授業のビデオ撮りを行った。

国語：　高一Ａ「現代国語：詩『蔦』を読む」
　　指導者　斉藤　（３月12日）
社会：（教材の関係で三年次に持ち越し）
数学：　高一Ｃ「数Ⅱ Ｂ：数列」
　　指導者　冨田　（３月18日）
理科：　高二Ａ「化学Ⅰ：イオン化傾向」
　　指導者　鈴木　孝　（３月８日）
英語：　高二Ｃ「英語Ｂ　Readers: Senior Swan English Readers 2 ; Lesson 9」
　　指導者　宮田　（11月26日）

〔表一6〕「教育実習の手引」新旧対照表

旧「教育実習の手引」		新「教育実習の手引」	
〔国語科〕	〔7〕		〔13〕
		※中学校国語科学習指導について	(2)
○中学校単元計画案「考えを深める」	(2)	○中学校単元計画案「言葉の力」	(2)
○中学校学習指導案「寺田寅彦の二短編」	(2)	○中学校学習指導案「朝のリレー(谷川俊太郎)」	(3)
		※ 同上 詩の全文	
		※高校国語科の学習指導について	(2)
○高校単元計画案「近世の文学」	(1.5)	○高校単元計画案「上代の文学」	(2)
○高校学習指導案「奥の細道」	(1.5)	○高校学習指導案「今昔物語」	(2)
〔社会科〕	〔8.5〕		〔10〕
○中学校単元計画案「国民経済の循環と家計」	(3)	※中学・高校の社会科の学習指導	(1)
○中学校学習指導案「家計と国民」	(1)	○中学校社会科指導案「天下統一へのあゆみ」	(4)
○高校単元計画案「動揺する封建制」	(2.5)	※社会科・地理の学習	(1)
○高校学習指導案「農村社会はどのように変質したか」	(2)	○高校地理学習指導案「日本の農牧業」	(3)
		※ 同上 教材と資料	(1)
〔数学科〕	〔10〕		〔18〕
		※学習指導について	(1)
		※中・高教材のつながり：①数②式③図形④関数⑤確率・統計	(5)
○中学校単元計画案「確率」	(3)		
○中学校学習指導案「式の係数と次数」	(2.5)	○中学校単元計画案「変化と対応」	(2)
○高校単元計画案「いろいろな関数の導関数」	(1.5)	○中学校学習指導案「二次方程式の解法」	(4)
		○高校単元計画案「微分法（基礎解析）」	(2)
○高校学習指導案「不等式」	(3)	○高校学習指導案「正弦・余弦・正接」	(3)
		※ 同上 教材	(1)
〔理科〕	〔9.5〕		〔17.5〕
○中学校単元計画案「生物の世界」	(1.5)	○中学校学習指導案「化学変化と物質全体の質量その2」	(2)
○中学校学習指導案「花の構造」	(1.5)		
○高校化学単元計画案「化学量論」	(1.5)	○高校物理指導案「重力による位置エネルギー」	(2.5)
○高校化学指導案「元素の性質と周期性」	(3)	○高校化学指導案「元素の性質と周期性」	(4)
○高校物理Ⅰ指導案「振動」	(1)	○高校生物指導案「遺伝と変異」	(2.5)
○高校地学指導案「地球の形」	(1)	※ 同上 教材	(2.5)
		○高校地学指導案「地球の形と大きさ」	(3)
		※ 同上 教材	(1)
〔英語科〕	〔7〕		〔12〕
○中学校単元計画案 "Do, Does"	(2)	※英語科学習指導の構想	(4)
○中学校学習指導案「一般動詞の疑問文」	(1)	○中学校単元計画案 "Basic English Patterns"	(1)
○高校英語B読本指導案 "The Undelivered Letter"	(1)	○中学校学習指導案「Be動詞の一般疑問文」	(2)
○高校英語B英作文指導案 "Formal There" の構文	(1)	※中学校学習指導案「callを用いた第五文型」	(2)
○高校英語B文法単元計画案「時制」	(1)	○高校英語Ⅱ学習指導案 "No Parking"	(2)
○高校英語B文法指導案「現在完了形」	(1)	※ 同上 教材（本文とプリントの抜粋）	(1)

録画を終えた授業については、主に指導者が分析し、オリエンテーション時のプログラムに編集する部分を抽出する作業を継続中である。また、英語の授業風景については、後述するように「教科教育法」の講義においてすでに活用された。

授業の録画は簡単にできることのようだが、なかなか実施できずにいるというのが実情である。ＶＴＲやカメラの操作自体は一旦マスターすればだれにでもできるが、現在のところ全教諭の２割程度の者しかできないし、50分の授業をカメラに収めるには２～３名の者が協力して行わないと良いものが撮れない、などの技術的な理由、ビデオカメラが一台しかない（これもプロジェクト専用でなく、本来は体育科所有のカメラである）という物理的な理由、さらには、思いつきで何げなく撮るという性格のものではなく、録画の対象となる授業に向けてのそれなりの準備が必要とされるなど計画上の理由もある。理想的には、一学期に各教科１つの授業のビデオ撮りが行えるとよいのだが、現実的には、年間５つ程度の授業となってしまう。

6.「教科教育法」におけるビデオの活用

本プロジェクトの主眼である「教育実習指導のシステム化」は、１つには、本校における実習指導体制の整備・統一であるが、もう１つには、「教科教育法」→「全学オリエンテーション」および「教育実習の手引」→「実習」のつながりの中でのシステムの確立という気持ちが込められていた。

「教科教育法」におけるビデオの活用は、この後者のねらいを具体化する１つの試みである。ここでは、二年次に実践された「英語教育法」での内容を報告する。

名古屋大学における「英語教育法」は、前期（４月～９月）に大学の教授または助教授が理論的な分野の講義を行い、後期（10月～３月）に附属学校の教諭が実践面にかかわる講義を分担している。筆者（宮田）が倉田教諭と組んでこの講義を担当するようになったのは、昭和52年度からである。毎年ほぼ同じ内容の講義を行っているが、56年度後期には、次に示すような項目を取り上げた。（第一講～五講は倉田、第六講～十講は宮田が担当した）

第一講：　指導要領の変遷
第二講：　中学校指導要領解説
第三講：　高等学校指導要領解説
第四講：　教授法概説
第五講：　生徒の能力差について
第六講：　中学校入門期の指導
第七講：　中学高学年の指導および指導技術のいろいろ
第八講：　高校生の指導
第九講：　模擬授業
第十講：　授業の実際

ビデオを用いたのは、この第十講においてであるが、それに至るまでの経過をまず述べておくことにしよう。

宮田担当の講義は、例年６回であるが、昨年度は曜日の関係で５回となった。これだけの講義で実践にかかわることがらをすべて網羅することは不可能なので、毎年、中学および高校での英語の授業を行う上での諸問題、指導技術の紹介と実演、教材研究および学習指導案の書き方、学生による模擬授業、テストの作成と評価などを、かなりのかけ足で、宮田自身の体験と実践を軸にして扱っている。いずれにせよ、実践面の講義の中でも、教育実習の前段階までのことがらを扱っているので、システム化のはかれる分野である。宮田は、以前にも講義にビデオを用いたことがあり、それなりの効果があると考えていたので、今回は、このプロジェクト計画に従って録画された２つの授業（中学および高校）を活用する方針をたて、次のように講義を進めていったのである。

第六講　（宮田担当の一回目：12月15日）

(1) 中学一年一学期中間テスト「聞きとりの問題」を学生たちにやらせてみる（後期の講義では、毎回、出欠をチェックするためにヒアリングのテストを行っているが、宮田の場合は、中学から高校へという順序で、実際に定期テストや授業で実施した問題を与えて、同時にこの分野でのテストと評価に関して学べるように配慮している）
(2) 英語教育の実践にあたって考えなくてはならないこと
(3) 中学校入門期の指導に関する諸問題
(4) ＧＤＭ教授法による指導例
　① ＧＤＭとは？
　② 第一回目の授業（I, You, He, She　の学習）の実演：学生は中学一年生のつもりで参加する
(5) 日本語・英語のずれに着目した指導例

第七講（１月12日）

(1) 中学三年「聞きとりテスト」の実施
(2) 中学高学年の指導について
　① 指導上の問題点
　② Teaching Plan の実例：中学二年「不規則動詞の過去形」
　③ 新出事項の導入の方法
　④ Pattern Practice の手法
　⑤ ピクチャーカード、フラッシュカード、テープ、ＯＨＰの利用

⑥　プリントの活用：中学三年用まとめプリントの実例配布

⑦　グループ学習の実践例

第八講（1月19日）

(1)　高校二年「聞きとりテスト」の実施

(2)　高校英語の指導

①　「聞きとりテスト」の分析

②　中・高のつながりの問題

③　指導の工夫：予習プリントの活用、辞書指導、英詩のイメージ表現、学力差を考慮した指導、内容把握をねらった読解指導、自由英作文とスピーチ、英作文におけるディクテーションの利用・・等々

第九講（1月26日）

(1)　高校三年英作文〝Cloze Dictation〟の実施

(2)　模擬授業

第十講（2月2日）

(1)　高校三年程度「聞きとりテスト」の実施

(2)　ＶＴＲを通して実際の授業風景を見る

第七講および八講の最後で、中学二年および高校二年（英語Ｂ読本）の教材を配布し、各自で教材研究し、指導案を作成しておくように指示しておいた。第九講では、それぞれの教材を用いた模擬授業を１名ずつ指名した学生にやらせてみた。それぞれ20～30分ほどの時間で行ったが、当然、指導案通りにすべては消化できないので、「ヤマ場」となる部分は詳しく、他の部分は指導項目の説明のみにとどめるように指示した。例えば、中学二年の教材では、復習は説明のみにとどめ、新出文型事項の導入と練習の具体的展開は時間をさいて指導案通りにやらせた。授業を終えるとすぐに、授業者の感想と反省、他の学生からの質問と意見、宮田からのコメントといった具合に、授業についての批評会を10～20分ほど行った。

第十講では、同一の教材について宮田が行った授業をＶＴＲで紹介した。いずれも、授業の流れに沿って授業者である宮田がそれぞれの学習活動の意図を解説しながら、主要な部分をピックアップして見せた。時々音声を消して、使用されている指導技術を確認したり、授業者の意図と生徒の反応のずれを説明したりした。高校二年の授業ではプリントを使用したので、それを配布してビデオを見るための補助資料とした。

こうして、学生たちは、同一の教材について

〔Ａ〕自分自身の考えた学習指導案

〔Ｂ〕模擬授業の学生が考えた指導手順

〔Ｃ〕教師の実践した指導例

という３つの異なった授業案を知ることになったので、これを宮田担当分のレポートの材料とした。また、ビデオを見終った直後に学生たちにアンケート調査を行い、ビデオの使用に関する意見を含めて教育実習および講義についてたずねてみた。このアンケートより主な項目を抜粋し、その結果と合わせて〔表－７〕にまとめてみた。

レポートについては、

（１）中二または高二の授業の指導案

（２）その意図・ねらい

（３）模擬授業、ビデオをみての感想

の３点をまとめるように指示した。(3)の点について、数名の学生の書いたものから引用してみよう。評価の対象となるレポートなので、教師の授業をほめすぎているきらいがないでもないが、少くとも、ビデオの授業がイメージ作りに役立ち、学生たちが授業を構想する上での刺激となったことはうかがえよう。

○ＶＴＲで先生の実際の授業風景を見せていただいて痛感したことは、必ずしも教師の思う通りに生徒が受け止められないということであった。先生も講義中に何度も言ってみえたように、このずれをうまく解消することが教師の力量であると思わざるを得ない。（中略）そして、中学一、二年という半分子供である低年令の生徒たちに焦点を当てた話題などで興味をひくという工夫も、中学校教師には要求されてくると思われる。その点では模擬授業において、新出事項導入の場面でスーパーマンを利用したのは的を得ている。だが、少し repeat の回数が少なかったことから、先生のコメントにもあったように、ウルトラマンなど他のテレビのキャラクターを取り入れて pattern practiceに利用したらよかったのではなかろうか。また、先生の授業では友人のニックネームを利用していた。これも、身近な話題提供として１つの工夫であろう。（文学部哲学科社会学専攻３年生女子）

○自分で中２の教材の指導案をたててみたので、中２の授業について考えてみると、ビデオで見た先生の授業は極力、日本語を避けているなあという感想をもった。あんなにも英語ばかりの授業で、生徒全員が理解できるのだろうかという気がする。しかし、日本語はあまり使わない方が望ましいのは確かなので、理想としては極力日本語を避け英語中心にするのが英語教育のあるべき姿であるとは思う。その点を考えてみると、模擬授業の方は、やや日本語に頼りすぎていたような気がする。（中略）ビデオで見た先生の授業は、さすがに本当の先生は授業の進め方やポイントの捕え方がうまいなあという気がしたけれど、生徒のあだ名をたずねるという形式で第５文型の導入をしてゆく途中、言われている本人が気

〔表―7〕　教育実習・教科教育法に関するアンケート（昭和57年2月2日実施：回答者52名）

1. 教育実習（4年次）の前に教科教育法を受講する今のシステムは？

よい	どちらでもよい	悪い
92％	4％	4％

2. 英語教育法後期（倉田・宮田担当）の講義は、教育実習のために

とても役立ちそう	役立ちそう	わからない	あまり関係なさそう	まったく関係なさそう
33％	58％	8％	2％	0％

※どんな点でそう思いましたか？
- ○具体的に授業の進め方が示される点；実践的であったから；教案の作成法が具体的にわかった
- ○実際の授業をビデオやテープによって知ることができたから；生徒の反応の仕方がわかる
- ○フラッシュカードやＯＨＰの効果的な利用法などを知ることができた
- ○音声を重視した授業の展開について学べた点；新教材の導入法、英語教育の変遷など
- ○様々な授業のやり方があることを再認識でき、それに対して自分なりの価値判断ができたから
- ○授業を見学する時にポイントとなる点がわかりそうに思えた
- ○実際は絶対理論通りにはいかないと思う
- ○授業の内容・進め方が出身高校（実習校）と全く違う。進学校ではこうはいかないと思った。しかし、将来教職についたら役立つと思う。

3. 宮田担当の講義のうち、一番役に立ったことは何ですか？（注：上記※と重複しているものは省いた）
- ○生徒の関心の持たせ方、注目のさせ方についての話
- ○英文を使う場面を設定して英語を口頭導入する方法を細かく話してくれたこと
- ○日本語中心でなく、英語中心の授業の進め方を知り、勉強になった
- ○創意工夫によって授業が単調になるのを避けることができるという点に気づいたこと

4. 模擬授業はどうでしたか？

とてもよかった	よかった	ふつう	あまりよくなかった	よくなかった	（無答4％）
8％	42％	38％	8％	0％	

※それはなぜですか？
- ○実践する時の隠れた問題が浮き上ってきて、それを知ることができたから
- ○他人のやり方のよい点、悪い点を知ることができたので
- ○現実からかけ離れた感じがしたが、実際に教案をたてること、ポイントの置き方など参考になった
- ○教案の中でとばす所が多く、授業らしく感じられない
- ○もう少し人数をふやし、グループで考えたりするとよい
- ○やはり本当の生徒の前でやらないと感じがつかめない

5. ＶＴＲで授業を見ましたが、どうでしたか？

とてもよかった	よかった	ふつう	あまりよくなかった	よくなかった
25％	56％	17％	2％	0％

※それはなぜですか？
- ○教師と生徒との間で行われるやりとりの関係がよくわかった
- ○実際はなかなか思う通りの答えが引き出せないことがわかった
- ○自分が経験したことのない視点からの授業の進め方、英語に対する考え方を知ったから
- ○最初から最後まで通して見たかった；違った先生の授業を見れたらよかったと思う

6. 後期の英語教育法について、要望・意見・感想、何でも自由に書いて下さい。
- ○模擬授業にもっと時間をさいて欲しい；実際の生徒を使っての模擬授業をやりたい
- ○中学生、高校生用のヒアリングのテストがおもしろかった
- ○自分が受けてきた英語の授業は月並みな、ワンパターンの授業ばかりでしたが、もっといろいろな方法（ＯＨＰや絵、英文の内容を図示させたり、日本語を使わない授業など）があるのを知り、それらが授業の上で非常に効果的であることがわかり、大変役立ちました

にしそうなあだ名が出てきたのはかわいそうだった。親しみやすい内容でよいと思ったのだけれど、いろいろと注意しなければいけない点があるんだなあと感じた。（中略）模擬授業でも、先生の授業でも、callを使った第5文型の文法事項の説明がなされていなかったし、それをやるとかえってむずかしくなって、意味を理解する妨げになるような気がして、私も指導案の中にそれを入れなかったけれど、そういった文法的な説明はしなくてもよいのだろうか。内容の理解あるいは新しい文型の応用をめざす上で、そのへんの文法的説明をどのようにするかというのは、むずかしい問題だと思う。（文学部文学科英文学専攻3年生女子）

○ビデオで宮田先生の授業を見せていただいてまず思ったことは、生徒のペースで授業を展開なさっているということでした。つまり、生徒の思考速度を踏えているということなのですが、これが教授法、教授内容以前の非常に大切な点だと思いました。模擬授業で同じ課をやったわけですが、あの時は大学生の我々でさえ、教師（その時の担当者）の話すことについていくのに苦労したことが経験としてあったので、なおさらだったのかも知れません。この生徒のペースで、なおかつ自分の言いたい内容、教えなければならない事項を盛り込んでいくのは非常に難しいことだと思っています。こういう自分本位でない、生徒の側に立ったペース配分が一番の課題と考えています。（教育学部教育学科3年生男子）

○（高二の模擬授業では）初めての経験で、さっぱりうまくいかず、準備にかかった時間とはうらはらに、報われない感じだった。生徒の前で上がってしまうなんて情ないことだけれども、実際、上がってしまって、十分な対応ができず残念だった。板書も、大学での板書をほとんどしない授業に慣れてしまっていて、どう書いてよいのか戸惑ってしまった。準備段階で一番困ったのは時間配分で、これだけのことを生徒にわからせるにはどれだけ時間がかかるのかさっぱりわからず、その結果詰めすぎの教案になってしまった。大失敗の授業だったけれども、授業を行うことがいかに大変かがよくわかっただけでも、大きな収穫だったと思う。ＶＴＲで実際の授業形態を見て一番心に残ったのは、「生徒中心」ということだった。これは、生徒を中心に置くということにとどまらず、いかに生徒の関心をひきだしていくかということにまで広げなければならないかが、生徒の実際の反応を見てよくわかった。同じ文を用いても、教え方によって生徒の反応は全く異ることになろう。具体的に良いと思ったのは、まず、例文に使用頻度の多い文を選んでいらした点である。全く賛成したい。それから、図示等により内容を実感させる授業の進め方である。時間の無駄は多いが、生徒が生き生きとしてやっているので、やはり良いと思う。（文学部文学科英文学専攻3年生女子：模擬授業で高二の担当者となった学生）

○まず模擬授業からみてみると、彼女の授業はテキパキとしていていいのだが、テキパキしているだけに、それについていける生徒は問題ないが、ついていくことのできない生徒は全くちんぷんかんぷんになってしまうのではないかと思った。たとえば、本文についての英文質問も非常に早く、聞き取りにくかった。また、本文についての要旨をつかませる前にもう少しヒント的なことを与えてもいいと思った。たとえば、先生の授業で、まず先生が英語で要約を言い、その後、なぜLangley氏は sharply に見たか？ blue boardとwooden boardとの違いは？　という質問をしている。これは、かなりこの本文の内容におけるキーポイントとなっていると思う。（中略）私が高校時代に受けてきた英語の授業は、すべて英文和訳で、生徒を順番に当てて和訳させるという形式をとっていた。だから、生徒の方も本文をさっと読んで全体を把握するという方法はとらず、最初から一文ずつ辞書をひいては和訳していくというふうであった。だから私は、この授業を見てとても驚き、文法云々よりも、まずざっと読んで全体をつかむということが大切であり、また、一文一文和訳しなくても本文の内容はつかめることがわかった。また、この授業では、生徒達が生き生きとしており、先生も生徒も同じようにこの授業での主体者であった。（教育学部教育学科3年生女子）

○中二の模擬授業とＶＴＲの授業を見比べて感じた最大の違いは、新しい文法事項の説明の量の差である。ＶＴＲでは、いきなり口頭でのやりとりから始まっていた。私が感じることは、あのようにいきなり新しい文型を口頭でやられると、生徒が戸惑ってしまうのではないかと思う。自分自身が中二の時には、確か、文法事項の説明が先になされていたのではないかと思う。確かに、ＶＴＲの方法を用いると、生徒は戸惑いながらも、なんとなく「～を…と呼ぶ」と言うのを"We call ～. "と言うのだと考えると思う。（中略）とすれば、英語独特の表現方法を身をもって教えられることにはなるのだろうが、私としては、生徒たちが戸惑ってしまうのではないかという心配をした。とくに私のように気の弱い生徒は、一種の英語恐怖に陥るのではないかと思った。それに比べると、模擬授業の方は、ていねいに日本語を用いての説明を第一に行う導入であった。このやり方ならば、生徒たちが戸惑うことはないと思った。

しかし、逆に言うと、生徒たちに考えさせる機会を与えない一方的な導入法であるのかもしれない。
（文学部文学科英文学専攻3年生男子）

○先生の授業で、教師が内容を英語で概要を説明する Oral Introduction をやられたが、これはよほどうまく内容を簡略化して、やさしく、短くしないと、生徒にとって苦痛になってしまうと思う。（中略）次に、いちいち新出単語をくり返すのは時間の無駄である。（中略）私が考えるには、内容把握を中心におく授業は、その全体的流れをつかむのであれば、Written Summary がベストだと思う。確かに絵を使った方がより理解しやすい場合もあるが、いつもいつもそればかりの一本だてではどうしようもない。今も述べたが、ここでの絵の使用と使用場所を先生は誤っておられると思う。（教育学部教育学科3年生男子）

アンケートの結果を見ると、後期の英語教育法は実践的であったことが好評で、9割の学生が「教育実習に（とても）役立ちそう」と考えている。また、模擬授業は支持率が5割で、良さを認めながらも人為的であることや不自然さを指摘している者がいたが、ビデオの方は、実際の教師と生徒のやりとりを見られたことが良かったようで、8割の支持があった。この模擬授業やビデオの授業を素材にして学生たちが様々なことを考えたことは、上に引用したいくつかの文章から明らかであろう。また、ビデオによる高二の授業は、教育学部の日比ゼミの授業研究の対象となっていたので、教育法受講者の中には、すでに実際に教室で参観した学生もいた。この学生たちの中の一人がレポートの中で次のように述べている。

「この授業は、私はゼミの関係で直接見せていただいたのだが、その時、授業の進み方がたいへん早いいのと、授業内容が自分の受けてきた授業と全く違っていたために、とても驚いた。まず、この物語に入って初めての授業なのに全訳をせず、先生の summary が最初になされただけだった。これで生徒みんなが理解できるのだろうかと思っていたが、今回もう一度、主な内容だけをピックアップして見て、それらがこの話の筋のヤマとなるべき重要点をおさえており、授業内容が理解できれば、この話のおおよその流れがつかめるのだということに気がついた。」
（教育学部教育学科3年生女子）

また、別の学生は、アンケートの5の項目に「よかった」と答え、その理由として

「日比ゼミで見た時より、もっとはっきり授業の様子がわかったから」（同3年生女子）

と書いている。教室で実際の授業を観察することは、その場の臨場感を味わいながら様々なことを学ぶことができ、実に有益なものであると思われるが、ともすると、教育実習中の実習生の中には、なにけなく授業参観している者も見かける。今回のビデオ利用による講義は、この点、授業を分析的に見たり、必要な観点を得ながら批判的に見られるので、教室で授業観察する場合よりも優っていることがあることを示唆している。今後、教育実習指導の各段階において、授業観察を効果的に行うための指導を充実する必要があろう。なお、高二の授業記録を、本紀要の英語科「高二における読解指導の工夫」に掲載しておいたので、参照していただきたい。

7. 全学オリエンテーションの改善

本プロジェクトでは、名古屋大学の学生を対象にした事前指導で配布される「教育実習の手引」を改訂することによって、全学オリエンテーションの効率化をはかり、実習指導全体のシステムとしての向上へとつなげてゆくことを考えていた。ところが、56年度末に、名古屋大学の教職課程委員会は従来1日の日程で行われていた事前指導を2日間に拡大することを決定し、その1日を附属教官で指導して欲しいとの要請を附属学校に行った。思いがけない依頼をうけて、われわれは急拠その指導内容を協議研究する必要に迫られた。もともと、附属側からは「手引」作成という形で事前指導に参加していたので、実際にオリエンテーションの場で指導する場合にも、「教科教育法」とのつながりを考えながら、改訂された「手引」に盛り込んだ内容に従って行うのがよいという方針が確認され、プロジェクト三年次の実践のトップバッターとして4月中旬に実施されることになった。その内容を概略示すと次のようである。

〔昭和57年度　教育実習事前指導〕

第一日目　4月10日（土）於　経済学部第1講義室
12：40～13：00　受付
13：00～13：10　教職課程委育会委員長あいさつ
13：10～14：00　教職課程委員会委員の紹介およびオリエンテーション
14：00～15：00　「現代中等教育の諸問題」（教育学部教授　高桑康雄）
15：00～15：10　休　け　い
15：10～16：10　「中学生・高校生の発達と生活指導」（同助教授　田畑　治）
16：10～16：30　閉講のことば（理学部　池田委員）

第二日目　4月17日（土）於　経済学部第1講義室他
12：40～13：00　受付
13：00～13：10　附属学校長あいさつ
13：10～13：50　「学校運営、教務、生活指導、課

外活動等について」(附属 運営委員)
13：50～14：00　休　け　い
14：00～14：40　映画「中学校教諭への道」
14：40～15：00　全体会閉講のことば（文学部 山下委員）
15：10～16：30　分科会「各教科の指導上の留意点について」（教科別：附属各教諭）

宮田は、「教科教育法」の延長という形で英語科の部会を担当した。前述した中二および高二の教材を用いたビデオの授業の学習指導案を「手引」に盛り込んだので、この2つの授業に焦点を合わせながら、教材研究の重要性、柔軟性のある教案作りなどの話をする一方、参考文献の紹介をしたり、提出されたレポートの講評などを行った。

8. プロジェクト三年次に向けて

本プロジェクトは3年で完結するのが当初の予定であったが、計画通りに行かないことが多く、果して次の一年でプロジェクトの目的がすべて達成できるかどうか危ぶまれる。しかし、教育実習指導全体のシステム化については、「教育実習の手引」の改訂作業がはかどる一方、全学オリエンテーションへの附属教官の参加という計画外の改善もなされたので、従前の実習指導体制が整備され、一部での効率化や強化があったことも事実である。

これをうけて、プロジェクト三年次には次のような計画を持っている。

(1) 本校オリエンテーション用プログラムを発展・充実させる。例えば、高校の授業風景、教科外の道徳・学活・ＬＴなどの諸活動を組み入れる。

(2) Ⅰ期（6月）の実習期間に、1～2名の実習生を追い、彼らの教師としての資質における成長の過程、悩みの解消など、他の実習生が見て参考になるような記録をＶＴＲなどでとる。これは、上記(1)のプログラムに組み入れることかできるし、本プロジェクトの効果や教育実習全体の改善について考える資料ともなろう。

(3) 同じくⅠ期の実習中に、適当な研究授業をＶＴＲで録画し、これを最終日の反省会の折に全実習生に見せ、合同の授業批評会を行う。

(4) 「教育実習の手引」の各教科内・教科間に見られる不統一な点を解消するとともに、必要な部分の再改訂を行う。

(5) Ⅱ期（9月）の実習に向け、上記(1)、(2)、(3)を盛り込んだ新しいオリエンテーションプログラムを製作する。

(6) 「全学オリエンテーション」のあり方を継続研究し、そのプログラムを大学の教職課程委員会と共同開発する。

(7) 引き続き、ビデオ番組を「教科教育法」にて活用する。

以上のように、プロジェクト完成年度である三年次には、〔表－1〕教育実習の流れの中の④および⑤に実践内容を拡大し、一年次、二年次で実践された①～③の各段階での研究成果と結びつけて、システムとしての教育実習指導を整えたいと考えている。

なお、本年10月下旬に計画されている本校主催の研究会において、それまでの実践内容をまとめて報告する予定なので、参会されて協議いただければ幸いである。